

世界メンタルヘルスデー 映画上映会プロジェクト 2026

神戸市東灘区
in

人はつながりで
生かされる

知っているようで知らない
震災後のメンタルヘルス

第1回 東灘区メンタルヘルス映画上映会

日時

9/26(土)

12:00受付開始

会場

神戸市立御影公会堂
白鶴ホール

参加費 500円
(受付で現金払い)

スケジュール

12:45～
映画上映(113分)
15:00～
ゲスト 米倉一磨さんとの対話

Guest

米倉一磨(よねくらかずま)さんは、福島県にある「相馬広域こころのケアセンターなごみ」のセンター長・看護師であり、上映作品に出演されています。

福祉事業所マーケットを同時に開催します♪

申込

申し込みは、右のQRコードから
またはメールでお願いします
✉mitsubachi-
higashinada@ymail.ne.jp



主催:精神保健地域支援の会・みつばち
東灘区メンタルヘルス映画上映会実行委員会
後援:社会福祉法人神戸市社会福祉協議会 東灘区社会福祉協議会
認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸

上映作品

『生きて、
生きて、
生きる。』



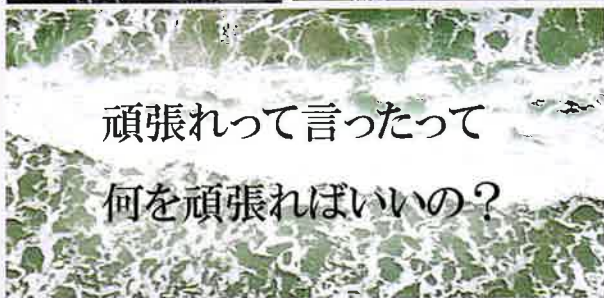
東日本大震災後の福島。

今もなお続く
見えにくい心の傷。

その現実を見つめながら、
『生きる』とは何かを問いかける
ドキュメンタリー映画。

『生きて、生きて、生きる。』

ワールドメディアフェスティバル2025
ドキュメンタリー部門 銀賞受賞作品



「人間もつと泣かなきゃだめだと思う」

震災と原発事故から13年。福島では、時間を経てから発症する遅発性PTSDなど、こころの病が多発していた。若者の自殺率や児童虐待も増加。メンタルクリニックの院長、蟻塚亮二医師は連日、多くの患者たちと向き合い、その声に耳を傾ける。連携するNPOこころのケアセンターの米倉一磨さんも、こころの不調を訴える利用者たちの自宅訪問を重ねるなど日々、奔走していた。

津波で夫が行方不明のままの女性、原発事故で避難中に息子を自死で失い自殺未遂を繰り返す男性、避難生活が長引く中、妻が認知症になった夫婦など、患者や利用者たちのおかれた状況には震災と原発事故の影響が色濃くにじむ。

かつて沖縄で沖縄戦の遅発性PTSDを診ていた蟻塚医師は、福島でも今後、同じケースが増えていくのではと考えていた。

ある日、枕元に行方不明の夫が現れたと話す女性。「生きていていいんだという希望を持った時に人は泣ける」と蟻塚さんは話す。米倉さんは、息子を失った男性にジングリスカンを一緒に焼くことを提案。やがてそれぞれの人々に小さな変化が訪れていく。

喪失感や絶望に打ちのめされながらも日々を生きようとする人々と、それを支える医療従事者たちのドキュメンタリー。



毎年、東灘区の人達は、世界メンタルヘルスデーが近くなったら、メンタルヘルスの課題や障害のある人たちや支援する人達と触れ合い、メンタルヘルスに関わる映画をみんなで一緒に観て、語らう時間をもつことできる。その日は誰もが自分のこころに目を向けて、自分を大切にすることを考えられる。これから毎年、この映画上映会を続けていくことで、そんな未来を創っていかたいと思います。

第1回東灘区メンタルヘルス映画上映会実行委員会

お問い合わせ ☒ mitsubachi-higashinada@ymail.ne.jp